繪本豐臣勲功記

七編

七

へ遠13
2209
67

へ速13 特
2209
巻 67

繪本豊臣勲功記七編卷之七　目録

七本槍内平野服部戦功　屬　加藤同之
同図　平野孫一小原
同　片桐助作奮勇磐安寺　屬　退路混戦
同図　加藤孫六連功　片桐助作宮警
柴田勝政退路防戦の図

柴田勝久冒刀諸謙盛政　原勘兵衛秘計

同図

臨再戦清正乞生竹当懸　切成許之

七勇三猛首を実検かさしむる図

清正当懸の竹を砍しむる図

清正生竹の当懸ふ首を結る図

早稲田大学図書館

絵本太閤記七編巻之七

櫻澤堂山　編輯

七本槍列

平野権平　小原新七　根城長門　水野助兵衛　加藤孫右衛門　浅井吉兵衛　福島市松　加藤清正　加藤嘉明

寿永ふ拙きる須ケ破へ只修とりて戦ふ名を呼び名を呼び

と拙つ非あるど。然ら嶽の一塩へ主よく従を捨棄意ふ

ク見べ居家まもく激戦して名を言ふふふ忠を涼ふ

も元弘建武の昔より浩る烈しき合戦ハ其例多てある

べ〻ど。嗚呼其若ふんべを居ふしと我ふり忠ふり

勇猛ある。加藤福島石川伊木櫻井稲屋ゞ忠戦ハ。兎角も

きぶろふ修と消。天狗も晴ふ魂を亮さん。然ふど不佐久

ク玄蕃允盛政ハ既ク刺使者を遣らセ諸方の自方ふ退

去べしとこゝを言ゝをしらべ。法將各自勢を率て。大將玄
蕃と一隊ゐあるゝんと。右往左往ゐ退きけるゞ東壁村ハ
往遠ゐゝをバ孤城をいふ清水谷ゐて隊伍と竪んと。名統
ゐて後路を拒抗ゞセ奴ハまで來ゐけゐ鳴清水嶽の西
南ある絶頂ゐあゝつて金の子生瓢の馬懸と月ゐ映ド
てゝてゝけゝをべ。あゞけゝハもつて弱けゝざゝん。羅羊の
虎ゐ値ゝる如く。吐と嵩ゝを。て天足地着し。勢つ起つ敗走
しけるゐ大將いけゐ制ゝをんども。肇の如く癡の如く。恥
とも名とも敢たゞして。儘ゞで逃げ中ゐ。玄蕃ゞ弟佐久
間源六実政ハ最前兄の使と偽ゝをバ退退んとゝけるゐ南
方余ゐ孔走しんをバ思ゞる白木杜飯の浦の城ゐ入て生捕ゝる。

しゞ。剰詮ゐ紀るゐ。蕃ゐ恥て引返し。見久右衛門ゝ
しゝや。兄弟共ゐ値偶て。英ゝ名決戦ゐ。撃死まべしと思
定め。飯浦の松陰ゝ。馬蹄を勒へて猶要時。紛嶽の方を眺所
ゐ。羽柴ゞ一隊の忠功士。平野藤平長泰い。紛嶽の近崩ゐ。
未曾故ゐ値されバ。隼目虎飛して敗を退蒐。飯浦の城ハ
まで。能下て彼方を祝ゐ白を紙給の戦ゐ食ゐ。狼の固ゐの
當際して。敬待類ゐ辛ゝい。佐久間源六実政ゐ。新ハ名敬
ぞと藤平長泰。近く能侍紛ぞ問。声を待ぞゐ彼士ゐ答て
名ハ玄蕃盛政ゝ舎弟。佐久間源六実正と。聆て藤平佐ゝを
陣参。羽柴ゞ陣内ゐ名を知ゝる。玉壁藤平出羽ゞ捻爰更
と呼ゝつ。勃然として翻出セい。然知ゝるハと源六実政ゝ十文

平野權平
鬼怒奮発
志く小原
新七汐
搦止る

字を合せたり。雙方劣らぬ勇士と勇士。突喝ハ石と砕ぐ如く。慈
実を怒る実と放てば。蹄を跑立る煙と起し。両馬進むを繞あ
まどる。審て退く性を見せぬ。繞周ハ大河の激巴港て。紅衣を
勢あり。逐ハ瀑布の水怒深く。巖を揺がを捐ゑて。千雲第
化両脚の。水をうつり尚速く。集散離合の修練を竭し。地
を振ふて戰ふ。いくあるん源六ぐ。発突後慈推平の。
上帯際と実ふと見しぐ。千檀巻より発拔と折ふと。平野の
うと操辺慈実。佐久間も返ぐ一世の朝と。馬を四五天跳退
去を。ゆく佐久間ぐ陣の兵輩。輝蔓して二勇士ぐ。間を端ゆく
推滿る。それぐあるゆも小原新七秀綱ハ。北國を名を猛ふ
めて。後来達る功も。ふふぐる勇士ありしぐ。遠遭自軍の敗

北を我ゆを畜さる孤奪と思ひ。ゆを徐ぐ軍ふあれだ。
潔ふ戰死して大将信家へ謝罪もべと一回心を決して。ゆ敬
何百万ありといふとも怖るゆあるさをども。切て嶽の経
研だふるも自兵を零去ゆ人ものと百騎だふの距後とゆ
り。返ゆまで遅き来りぐ。方僅源六ぐ亀きを考て有安とも
言ぐ正一つ地ゆ平野を目的突蔓る。拔平長康こを考る
ふ。呀ゆのくしき敬の研佐容らぬ首ゆいくつもあを。
磬提らんぐと駆りゆふ。総綽盤して搬合せる其際ゆ源六
実政ハ馬を速めて引退き。途方ゆ知らぐあるゆふ。
の庄ハも弾らぐ兄久右衛門とも。ふ紀及
の地ゆひそを居て武勇とゆそぐ。
拔平と芝傷と去らぐ。遁つ寒つ拂ひつ突つを上ゆ炎を敬つ

くと考きべ歸下ふ起る泡煙ハ馬の跳るふつもゝまて雪
上低下四角八面突いたおひハ山とも拔くん拒抗ぐる相ハ海と
も壓も要時ハ緒員も果ざりしぐ原來ふ原ハ敵軍ふ心後
きて雪肝も寒ハ怯者ふる也えぬく槍法撓も來て能
尖ふ委の見へるると然知るハと桂平長康怒氣凛然
と突出た槍掛拔るこいとまなく絡齒のたづきより斜て
徼りて社摺際へ白き能尖ふ紅染て三四すゞど突出さま
了得て個き彩七も苦と叫て馬より零ると桂平既て首極
吹鞍の呉輪ふ拔者て小刻息とぞ次ぐる怪懲ぐる
ふ此軍の中より。松村友十郎と号抵平野ふ槍を合もる
る。六七合ふ迫びしぐ。こもも同ぐく突伏ちもるもふふ

首を極捉つ。馬を繞ませ槍声高く嗅叫て此名を延記く
進ゝも く。粤ふ名佐久写源六ぐ兄久左衛つ安次ハ敵ハ
神戸名左衛つと一隊ふ為ふ大岩山の背路を縱横云得ふ
燒起るぐ。九日の夜ふ至りるふ秀吉の大軍此地ふ跳長這
と考途と攻起るふ枝寨の軍名も峯を伝ひ尾畔を走力と勢
セて接紀るもへ虎狼鬼悍の此將も日來の勇名従都して各款の
取逼ぎる先ふ之を後是ぐと落失るを恥ふ心を懸ゝる佐久
間久左衛つ安次。こを一大ふの際涯ふりと級の浦の坂中より。取
て返して自方と繞め僅の勢と魚鱗ふ徒へて返來る款を待蒐ゝハ。
大張柴田ぐ一將ありとも相表へて巍ゝく返ふ久左衛つぐ旨人
神戸名左衛つ水野助名清ふ佐久写安次ぐ呼行と云て槍ふ繞ゝ

きは勅答や大将さる身の不合へ最も恥こそあるまゝ中〻見苦敷りと
いへども既生時ありうゝ〻ぞ死ともて狂じ〻ふ奈俺们こゝふ踏止り
力を竭して拒抗あべやたゝ故名一騎とゞも猛進しのうもづ死公ふへ
一応退地と去て玄蕃頭の仍方を汎れ居ゝとも不拵家公の命を
きさもふこそ忠孝ふさつ中ゝ不ふ私へり暇どるうちふ敵退
来〻べそう陣ふふるべし。快〻敵さも逃れと強る隙ふたや上
方勢正面ふあつて近進るを。神戸水聖左右より久左衛つと北へ
退き。敵中へ突と割て投浪と激たる巖の如く。鞭ども撫どる
怯まべこそふ鶴万象虚往実来有ともて有とせど云も云と
ふさび合まるより牧離る〻迷く。教くとなもへバ快集り推つ返ま
つ戦ふ所ふ那柴の群と絶出る一騎の武者風最嶺めしきへ敵恢

甚内康治あり。白き絡ふ鹿毛の図と描さる面像して逃る佐久間
が軍卒と退捲く。勢多の藤雅と鞭ごとく旋風の渡石巻ふ等しく。
畫て蔓地ふ突崩ま地方へ名ふ負ふ第ふあり月ハ明ろありとゝ
ども泄山蔭の樹下園近も退も一騎歩。英名烈気敵恢ふ横起ら
て北國武者雲嘔も拄ど散くふ走ると退蔓退逼てるふ嵩る衆
突伏く〻激憤ふして戦ふと待後ろうる水聖助名情一声呼で
甚内ふ陸蕃の像く突蔓ると意得うと敵恢も陰横部して撫
合。獅子と猛り龍と怒り夫と蕃水と化すでふ進退縦横一数時
祚秘と幸ひ鬼術と挑く互ふ怯まど戦ひ〻。秀吉の臣家ふ
も。役弦耳目の甚内康治一騎烈しく突出ま捲の遊るふ逆ふく敵
任と右より左へ掠ぬ見忽地泉下の鬼とハ化ぬ。それぞふあつふる

神戸長吉為つ徳嘉ハ老練至熟の勇士ふ也ゝ。只管自分の退と
投ゐて進るゝ。ばけハと共退ふ退来る故と突敵ー斬敵ー。こゝを
あゝ〳〵ふ岩の方へ数度を重ねん十四又十ばど退きる。益ふ加義孫六
赤明ハ七殺ゞふろの一強ふして武勇も常らざりるゞ。多勢の敵
と退記ゝ。敵の浦まで推出也孫六其日の軍襲ハ白浪とも。後り
る富士の山の塊と思ー。俳徊の大鞭靴ふハ猶より孫三一面ふ雲ふ
乗ゝり。天女の姿と金泥浪泥いと細ふ落雷ふーゞる美雲の鎧ふ。
紫綾の縄拭ゝるハ天女ふ対ゝる紫雲ゝも。へ富士の塊ふ天人
ハ二保の浦辺ふ形叢を拭ゝ。そゝろとゞろり鞭ゝる。その相一層猛
き。て見ゆるふ月の光の映ゝふゝ。ゝる烈鋭戦場ふも央
用とゝくゝゝふ。孫六ゝゞふ岩ゝハ正一岩ふ

食思ーゝゞも。いゝゞふ中の功誉ゝゞ。いゝふも良育と得ん
ものと。平生ふ好める十文字の長戟を吐地の像く突記据記
岩ゝる故と八般ふ。退逼ゝ岩ゝふ突然。谷陳ゝる落ふ捲落ー。更
故もゝゝふと眼を織り。麓と階戦跳戦。文室の西の長嶺と。候
ゝるゝど退出る。ゝふ濃井吉兵衛刈改ハ。主将の三左衛門勝改
を徳示ー。退路の計議を強示ー。そのゝも一段引後り。岩通
安ふ退くゝゝを。後分の方ゝゝ加義孫六赤明濃井吉兵衛
兄知ゝるハと声たゝゝふ呼ゝる。這時濃井ふ一足先と杖ふ中
村渡辺ゝんど。立並で退くゝゝ。當惑月ふ。輝きて変ゝる西ふ。
故ゝゝゝ久自方ゝる。恥ゝふ所ゝる西ふ。今赤明ふ声懸ゝゝて。
耳ゝ風もゝゝざれば。主人の先達も見来ゝいおゝ。踏

止まつて星綱ともろ不。孫六是を見て近寄り。吉兵衛御糸とろの十文字の絵とをて。微塵不あれと撫蒐る。刑政もまこと寄入ろと。紙夷と丁度合せろ。雙方奇怪の業。桃蚤迷。波改電尾と拘ろ結く風平西脚と突ろも利く。千鈴万磨の術と謁し孫六吉兵衛迦互不。劣らドものと年ひしゞ。月の光不脚下の。岩際の凹凸定つあゝぞ。滝井刑政勇あれども紋壮不氣怯しゝれば。心の義不おらざるおや未の根不踏き兵兵ところと。加爰いつでろ寄通せべき。蒐一突迫檢阪。滝井の脳膈血烟鬱く。叫声と共不柳通せば。あゝ〳〵もつてたろるべ。膳こ倒ぶと赤明。其まろ有と撥剛て。いよ〳〵きをく〳〵ハ演ろ〳〵こそ寄つ不れ

七本絵之内 尼将助俊秋と安芸弥五右衛門と厲退路混戰

金ハ牢〳〵と叫ども。火のとも不鎖け。石ハ重ろ不也ろ不。水のとも不溢も。士勇あゝんば果指ゝんぞ逃あゝんや。粤不柴田佐久間ぶ股肱ろ安芸弥五右衛門秀任ハ。劣を走る自分の兵と。逃不不技け那程不敵ひ。藥来る上方勢と。逃撥〳〵弾と拔んで只一筋。勝不乘ろ敵兵と。各へ捲蒐尾仲へ居し。勇のあるべけ拒抗記て。柴田三左衛門勝政と。一孫不あゝんと搭きろ。英勇憤ハさあゝ〳〵不。帝釋天王の須弥を看ろて。修羅禁軍と何ろぶ係く。勢兵として當りゝ〳〵ぞ。足久々ろとろ不羽柴反の殿傷不辞。尼将助俊秋元ハ。同上安芸ぶ挙止と。彼方の業ろり家紋し。て。新ハ良敵ぞ撃拘て。今々の切誉不佐へ

七本鎗の内
加藤孫六
浅井吉兵衛と
塚尼桐助作
安彦
弥五
右ヱ門
と撃

んものと。大紀の江河を渉るが如く。峯の迴路踏ひ。陰滿ま
ぢく弛進るを。安芳儼と眄りて。根強くも逆ふ歎の奴輩。
ぞ用ふ東西ふて絶足ふまんと。強物惜して立ち相懲拔
ふるを足肥て胄暴く。鬼をも欺く大膳ぞり。斤桐迫くと進
倦。天晴離くしを帥劒行ぞ。斤桐助佐對敵ふ望まん。そこ
迫ふ人あと声をて。隱風の像く走り進。安芳をとしも孫む
して。快来ふ来ふ来ふ。ぞのまや絵。志ぢき蒐ぶべ斤桐ハ。まと中
双ふして猛ふハ七寸朱を滴ぎ。江河甘露の任。天九郎俊
長ぢ精強しる徒長の絵。一遍突用まるとハ。胄ハものうハ
猿石をも。拗破ると泥より脆し。惰て紛や把ふハ達者の
斤桐助佐。児獅子の瀑布ふ激まるごとく。奥て蒐ぶべ。安

芳ハ酔。酔氣の酒海ふ牡ふぢごとく。叫んで桃む電突雷打。逆
ふ虚吸の虚を窺ひ。窮布を隘んで拗絵の雙方劣りんちらく
ぢも。剣ふ腹肥し孫又右衛門斤桐の後の結さふ。左右を顧ること
ありぢく。虚をつく祇突を更る際ふ雲もて殺禹と蹈尾の正
中。突微されて孫五右衛門。鞍を離もて丘より下。馬一斉ふ拗び
落るを。佐るより跳て命。谷間ふ下りて安芳が首を。方の
ごとくふ拗刻早ぬ。これを故せて。絵嶽七本絵と稱へり。是
其戦場る布ハ。坂尾より白木杜。庭戸の濱の中間ふ。
然布ぢふ佐久間玄蕃允盛政ハ。自己が勇ふ慢じて。勝家
の旗を用ひず。これが為ふ佐將軍。逆岩那谷にて多く撃
を絶ふ大敗軍とまり。寅の刻ふ至りられども。難布を退く

こと疑なし。時は秋あり深秋あり。晋多くも疾果。進むも退も自由なるべし。異不思議の懐とあり。おのゞ志しを零行られば大岩山を攻陷せり。敵の威勢更ふあり。半は撃を半は零失せ。方今は漸く柴田三左衛門勝政ゞ。三千餘騎のみありと云へども

それも弱り微ふ有りて。隙なも疎ふ擾されあるべし。死戦決して接戦しる。這胸柴田勝家も。雄弁勢を操倚て。一戦とは思ひしらるも。菖蒲谷を過ふ堀久太郎。穿通の母りへ小川土佐守。大枝山ふは木村小隼人其外前井堀尾。赤松。黒田東山。明授田の佐兵士。佐方の逢坂遮留め。勝ふ乗せて攻寄るも。北軍なゞいふ分敗して。投合ことなりゞ。こゝふ多り。金森五郎八。徳山五兵衛。倘ハ。玄蕃ろ我慢の勇ふ強

乗て斯敗軍ふありる繰ょを限留りたるゞ弟。拒抗もゆゝで退き住。其餘の山路。鉢ゝ。宿屋浅井。安藤。相羽ゞ寧倫。金森ゞ

ゝ戦死しるれば自分愈ゝ敗走せ。四方。柴田勝家大ふ慌き惘然として立ゝ。ゞ。天を仰で歎息せら。我運命も今此ふ殫果ゝと覚悟めて。嗚呼是非も有やと。

大将斯まで嘆息するふ。後士いでゝ続むべき。悠然としゝ

殘兵を減し。戦ゝ懦くゝる。兵家ふ多るべ老練の柴田勝家。強卒を激して声暴ふ。自分敗軍也と云ふ。あどろ怖るゝ。

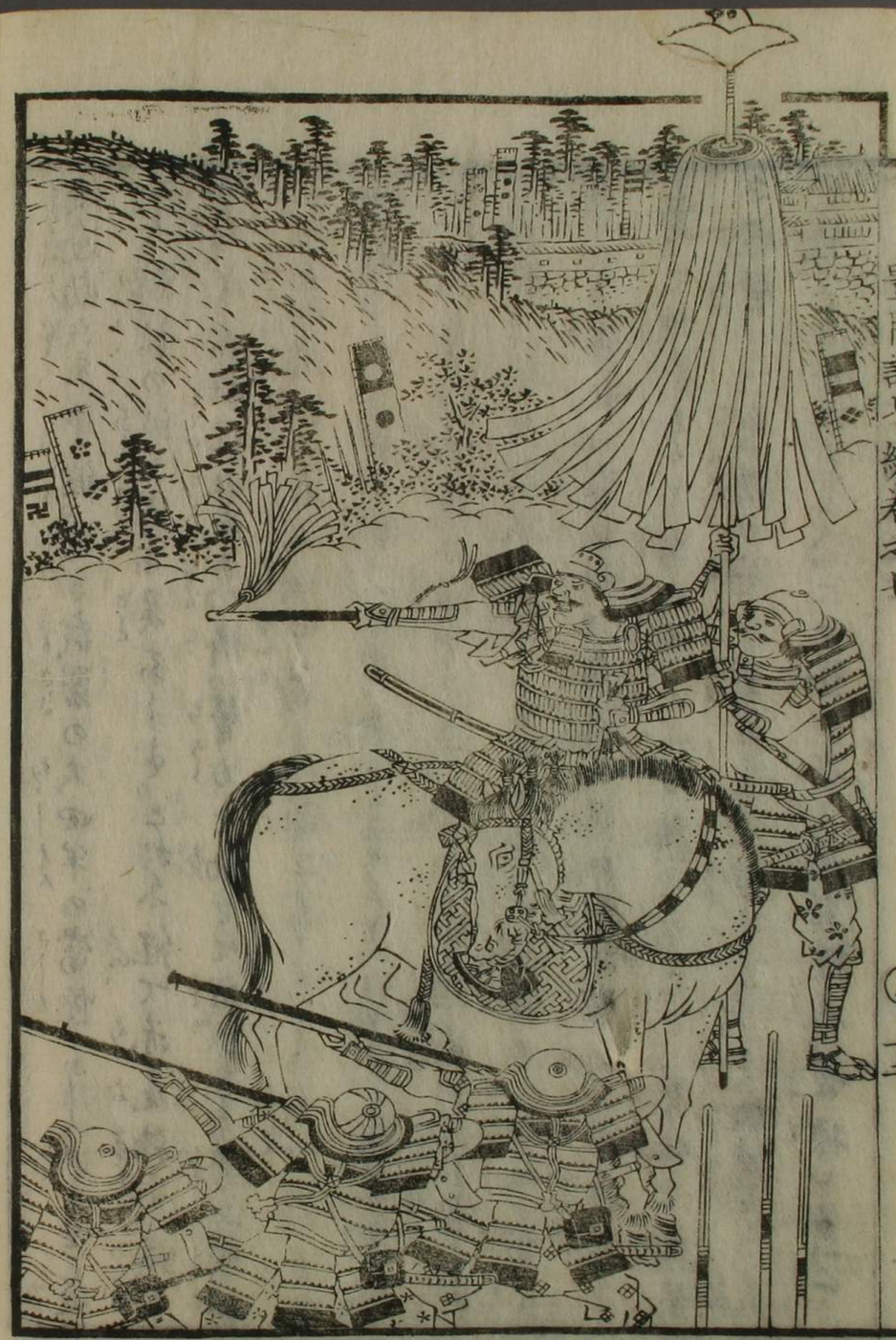
あらんや。我旗本一万餘騎あり。縦令秀吉猛虎の威とゝ。

勇を振ふと云ふ。我ふも猛弱の勢あつて。劣るべきこ

とはある。兵家ふ勝あり敗ることは。原来然しる常ある

ものと。今更悔るも及ぶべからず。汝脩驚くことあるを。勝家と
づから馳向ふ。時を移さず發兵敗さん。柴田權六淺井組る等
夜人ハ。弦長を率て二隊ハ領を。盛政。勝政を救ふべし 僥倖
叛中の緯なるべ。笠懸を擬妻て。馳進ふ。ふうち紛を失ふく
敗帰るべ。其際ハ。ふれも上方勢ハ。一驟吹せて平生の鬼
柴田が猛威とゆ。先やいそげと令しつも。二ハ孫人を二
隊ハ。勝久 利國 を向ふ。然して。勝家ハ
らハ。いつくよりや撃出んと。霎時屋合せ立ふる。備又羽
柴の結軍勢ハいづも劣行とするものあく。遂條ふ極出し。
戦お勢を大軍ハ。右往左往ハ退撃しふ。亟兵いよく
帰懼を。百騎ハ一騎も戦ふ輩なく。崩走ると羽柴ケあくり

渡邊勘兵衛重綱。白き裁裂の大四半の當幟あり。逃るを追
こと。鯢鯨の波を巻ハ吳あるまで。これハ繼て赤尾孫六。滝聖
日向守。西脇弥五右衛門つ倅。薄力を勁せて戦ひる。粤ハ柴田
三左衛門勝政ハ。佐久間玄蕃と一隊ハあるうんと。虎口いづちへ
随得べしと。その退路を屋合せ立ふると。次第ふ敗亡ふ
りて。いよく難免ハ迫びしうべ。今いくて終嶽の。峯條の徑
と西北へ。朝拔駆拔落行とするハ。羽柴秀勝の一隊他。長の
方より発起。五百餘挺の鳥銃を。銃次速ハ撃起くく。正面ハ
あつて政長ると。勝政もとしも絶ぐ色なく。隊他と系後
ハ操整し。多流の勢ハ令あして。劣るまでと敗亡くく。是
ハ記るそのあるハ。二の隊の兵士三百餘人。長揖をもつて



鳥銃の隊
精を以て
柴田勝政
退路を
防がしむ

攅くゝ。沮路遥ゝ退返し。其隙ゝ峯を退行しへ。退法裂しく覽くりし。爰ゝ玄蕃盛政へ。我慢勇より斬だくり。自方敵軍をくりしゝ。而後帰國し法士宴ゝ。暮び射面ありゞし。只返上い戦死して恥を雪ぐゝ如べくゝと。心を決しくり なれば。いとゞ猛き盛政なるゝ。決死の血戦を。誰くへ独り當得へくん。進難くる上方勢を。彼薄掘して會釈もなく。撃記くゝ捲返せば。馬前ゝ向ふ敵へなく。紛ことして強勢を。返ゝ赤丹羽五郎左衛門長秀へ。山梨濵より四五丁ほど。紙ぶ嶽ゝ迫づきて。軍の曉嶮を窺ふところゝ。秀吉速くも。岩渡して。此國勢を追撃しくる最中なるば。今こそ必勝の時至まり。もくや慕もと二ゝ孫人。長姫ゝ孫仙て紙ゞ嶽へ推出し。

長秀くづくゝ正魁ゝ。采幣の毛も揮ひたくり。蒐をや蒐をと指揮しくれば。江ゝ三郎右衛門望月内蔵助倅。二隊ゝ部くゝ狀卒を懸ま。時折を減合敷くゝ。多流敷を蒐蘿羅る。原表次郎元治ぶ。距後隊仙これゝ出くりて。退却らをしくし決れゝふゝ。戦闘最中なくる撥舎。生恒や大將長秀。持病の癪疾出発り。苦痛太甚強くりをども。兵ともあさで鎧の上帯。勝ゞ猛くたくりゝ引緘。蝶新しくゝも令ゝくるゞ。別ゝ痛く病発て。おもたゞ持る采幣を。大地へ撥他と墜しくをば。近士從臣おゝひゝ猿き。戦場なをば備や主人ゝ。迂失もやゝくん くと忍をて。一応返場を退きゝひ。御保書を加えらを。然しく て出戦おくるべしと。強云しくをば五郎左衛門。婚尾際を壓え

ゐぐゝ。依然として笑を含み。勇士ハ病症ハ命を終ゑ。戦場ハ
して死を遂るこそ大幸なれ。あゞ如是の病疾ハ眩して。退陣も
づゝ不潤わゝんや。進めやと正魁ハ。陣打振て馳出せば。主
の号令ハおくれまじと。村上次郎左衛門。海老名左衛門。尾
張左衛門。吉田小源太。青山伊賀守。坂井典右衛門。望月。江口
あどい門ゝ。乾坤べゝ主人を正央ハ。擁護しても名将の号
流を馬蹄ハ蹂躙へ。号流別血を捜で。正円ハ張血を立。忠
臣義士の一致して。敵を破らんるを望らべ。主を大持ハ
互失を。取らじと合戦の進値。金車ありといへども。丹
羽家の武道の錬磨あること。此をいて知ぬべし。今丹羽勢
ハ向ふ敵ハ原表治郎。安井左迎俗を退来り。文室嶺の陣

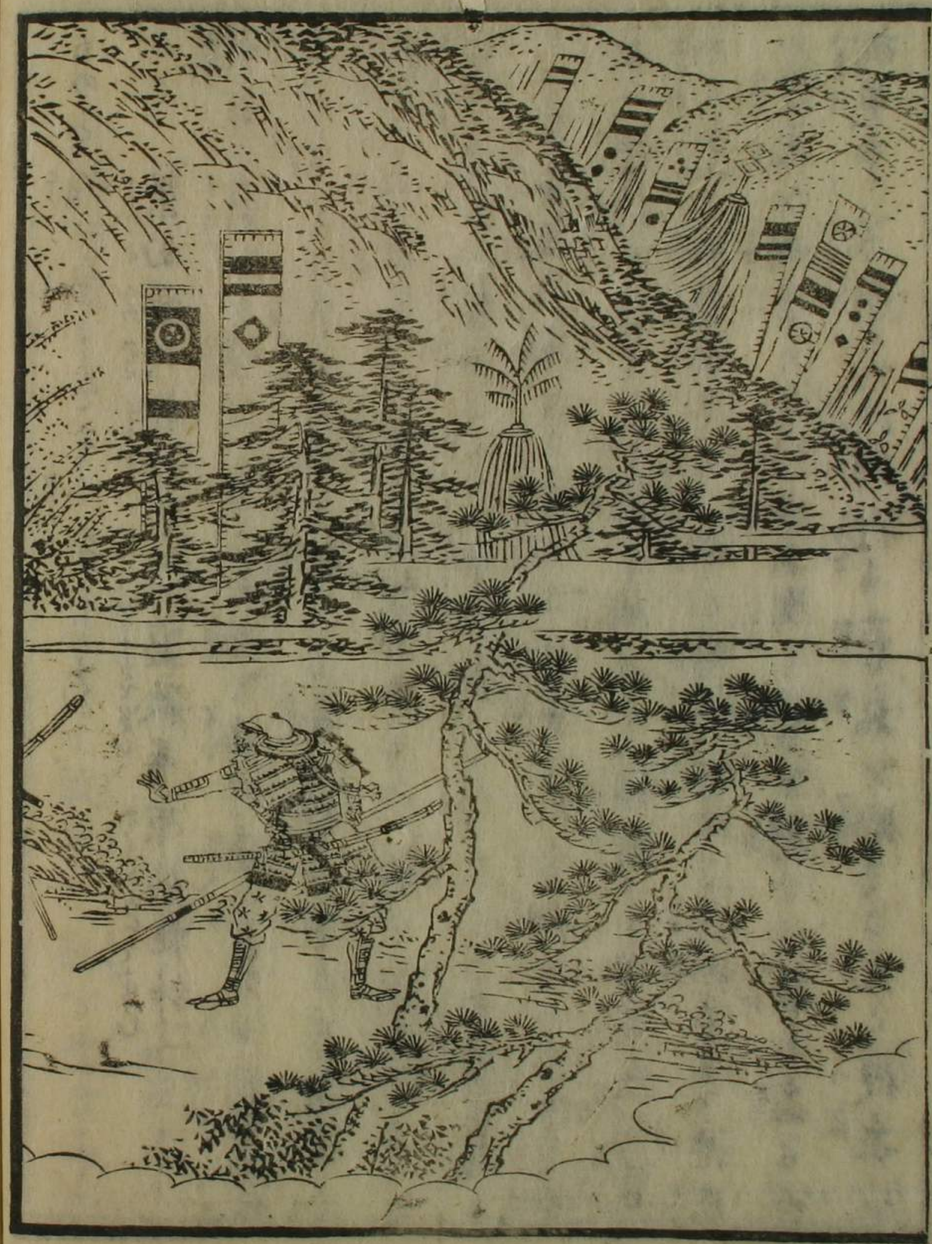
頭ハて。通もまじと喰ふ。佐久間も共ハ取て返し。原
安井俗ハ力を勠せて。死恐十分ハ拒抗ゝるゆゑ。栗山羽根田
も崩りゝ。撓むところハ丹羽ゝ軍勢。九鈴の深淵を生る
ゝ係く。會釈もあさで原安井を。陰下の鬼ハ化てくれんと。
弱紀ゝる栗山羽根田を辟ハ退ゝせ。村上海老尾張吉田。青
山。坂井。望月俗面向不背ハ攻ゝこ。息とも次ゝで接記ば。
北國勢ハ猶更ハ。首將の令を聞ばこそ。主没親る
の信義も懐ゝ。逸足出して逃出せ。原表次郎声を
烈ゝ。遠き自方の拳止ゝ。多勢ハ却て手足ハ繁まる。いで
ゝれ一騎東西ゝ。怒地憤竭ハ陰捻綽。突ことをば。
縱横ハ敗起こ。両三度ハど捲返せば。原一人の激勢ハ。

当得ぜして紛こと。敵孔まるを安井。佐久間。性と嗔て濫波の條く。大返しふ突殺しるをば。此威勢ふや怖をるん。百騎ばりハ退欲あるをば。原孝次郎安井左迫。大口開て茫然とうち笑ひ。雑軍まる上方武者。然もあるべしと称りつ。後より徐く退き。玄蕃と一塊ふあるとらんどる。自方ハ微勢故ハ取次ふ勢屠して。防ぐあるを赤術ふるをば。玄蕃を守護して退くところふ。神戸兵左衛つ。亂軍中を遁を出。百騎ばりして孤軍まる四方。盛政もこし気を得る。隙もあるざるふ柴田権六。浅見但馬守。二ら強人を率跟。迎軍として来しをば。玄蕃術く疲氣を発し。新てハ防容く退去せんより。取て返して英ぐし。一戦して敵軍の。恥を雪ぎるんものと。須臾して小立しる

柴田勝久冒刀後徒盛政屬原勧秘計

鼠死ふ窮ゆる時ハ。かるく猫を噛の。愈ハ益ふ北國方の敵勢。次第ふ退逼らをて。遂ふ命を捨んようふと。抜還ふ疎少ふ戦死ず。或ハ家証をふもふの族ハ。後士をまでる殘害まのしと。零行もまく勧ばる。これぐためふ鬼神と稱し。玄蕃先も。崩るく自方なを怒さん。方術もあるて自張兵ハ。漂行とかりて東西を辨せず。難戦しるる其所ハ神戸兵左衛つ。浅見但馬守。柴田権六。取次ふ死かるる。独率の鋭氣を調台るをば。這ふ漸く勇を想ず。敵ふ当るの相見ゆるを。原孝次郎牧る勇氣を勵まるんと。使兵を

敗を瞋る
佐久間
盛政戦
死せんと
もとを諫めて柴田
勝久共に心を決
する



もつて禀遣をさるゆゑ。乃ち不屑あるといへども。距後の總止つ
まらん。各ハ只愉快。こゝをハ續て返させ玉へ。大返ハまる晌ハ。
ゑ〻ハ〻で一戦を激まるゝ〻ハ。勝利あるべきゆゑハ。是迄地
ハして生を得るあり。只唯退くんぞする晌ハ。勝ハ乗るる敵
兵の。大軍ハして退来るるをバ。恐らくハ自方一人も。活路
る輩あるべからんば。快く名誉ハ綾ゑ玉へと。頻ハ勧達るハ
ぞ。盛政験ハもと自の勢を。操進んとまる際もあるせぞ。九
十騎百騎脚下へ。上方勢の亂を蒐をバ。先鋒敵より退散
さんと蓄然として長槍捨綽。逃傍自兵を左右ハ用ゑ。暮
地ハ進んで敵兵を。四角八面ハ叩散せバ。先ハ進し上方勢。
向ハも背くも差別あり。亂敗せゝをて血骸の峯ハ峯と

添るが如く。溪ハ半分を埋むるとまぞ。漫く見るるあるハ緑
樹碧艸色変じて。盧紅ハ血を染しハ。鄙蜀の花の満山ハ
開るとだるり疑たる。盛政勇のあらんゑぎり。捲繰りて
戦年も。瞞蛇の像く幡未て。用ハ達ねバ甚乗投奔。例の
縛捉打振こし。慌を撃バ首一奇。肩も背骨も鐵ハあり。胴
を払へバ腕腰胃腸。草摺をまぞ鏡らをて。一発十法七法と。
拠ハどハ撃ハどハ。強ゑハ一個故向輩の。命全きことを得
んや。験ハ鬼玄蕃が猛憤の新こそあゝめと驚嘆せり。是
ハ因て十分ハ。勝奏るる上方勢も。怯怖をて迫づれ得ぞ。
慄くとして逃返を。玄蕃も要時狭章を休ませ。暮び敵
と拒ぐんと。馬ハ柏を弛出を浅。柴田権六勝久ハ。忙事

走出。德ふ拘延う。斯ハ何地へゝ往を玉ふ。定て敵軍ふ恥
玉ひ。無謀の戰場ふ能向ひ。戰死しを玉ふ心中あゝんが。我
父勝家蚤くも察して。速清のさめふ乃茅を。それまで耆
越もふされゝう。法將後來戰死ふせしハ。今更悔て益ふ
なきど。只俺門が大幸ハ。是下の無事こそ嬉しけれ。統一端
の敵北を。恥辱とし玉ハ。緯あるを。軍ハ時の運あるものを。
戰ふ毎ふ必勝を。得べき乃理のいらさんや。勝負ハ兵家の
平生ふあるべ。退べき時ハ一應退て。時節を待例へ。然して
至利の軍ふうち勝。今の恥辱を雪ぐこそ。武乃本意
あるべけれ。まづ本陣へ玉ひり。父勝家と再軍の。謀議を
懷玉へゝと。云を謁して陳めるを玄蕃尤右ふ聽

うちふり。否とよ勝久ゝれ何の面目あつてゝ。再本陣ふ玉帰
りて。法將ふ面を合るべき。疎更分屬せゝるゝ。將卒大半
戰死せゝ。今吾一個生を求めて。勝家の許ふ玉帰らば
臆病未練の汚名を負。法將ふも亦恥笑ゝて。生前死
後の恥るべし。速朝ふ迎び吾獨。本陣ふ帰玉ハとて。那至の
復ふ達ゝとあゝんや。迎敵軍も盛改へあり。切ていハ法士へ
の解釈ふ。迎北を去らぬ戰死して。他の恨も怕恥る清
都せんこそ帰ひ玉ふ。尤右いふうち敵亦來らば。某方ふ
出で玉失わゝん。快玉帰玉と言葉て。韁控操繰出を。勝久
程も強禁め。其ハ道理あるふ似れども。劍ふ一端の小義
ふして。忠孝共ふ背きゝう。斯有大敵を受る軍ハ。一率

ありとも惜むべく。求めざる時あるか。彩や無二の勇将をや。只顧ふ活路より。微勢の自分を扶助らる。工夫こそあらまし有りしかを。又猶家ハ只下をもて。眼ともあり只ともしつるか。今一身の恥を懐ふて。徒ふ戦死しもつぐ。程遠上ふも勝家の一臂を落も哭歎あり。不忠不孝の名を立んこと。あゞ遠上のあるべきか。無益の徒頻しもつんより。快卒陣ふ返されて。勝家の意を寧めもつぐ。忠信孝義共ふ全さし。黄口痴舌の乃男ゞ言を竭して奚孫まるも金勝家の教示あり。偶合不次ふ伴帰まと。命令を奉て来りつるゞ僥倖ふして遠地ふ遂しい。柴田の家運強ふして。余数尽ざる所あり。快退ろせもあるまと。頻ふ孫めるる撥舎ろ。那方の樹間ふ。多勢の敵の

喊の声涌ゞ如く。発記際もあるべこそ。浅野日向守を殿孫と して。葉山。羽根田一万ばかり。これ整拵んと佐久間ゞ孫伍を。四角八面より推捷掘。火れとあつて攻ろ。浅見但馬守これを寄るより。敵ふ孫動ハあさもまゞ。只一撥ふ退返さんと。先ふ立せしを。舎鈍と。敵るあさせぞ一吐ふ突と。亂発あさせ。兵ところを百雑人。長槍列伍の独卒輩。足極違を推出させ。息とる次ゞで突崩を。これふ続て神ゞ兵庁来つ。同じく自勢を懸して。面る解らぞ潮記れば葉山。羽根田。浅野ゞ兵士。思設る敵の暴孫ふ。當りがさくやおもひろん。攅こふあつて敗走を。玄蕃盛政これを追うより。逞を鳴して殿記。亦のり出んとするを勝久。靶把て敗されば。盛政大ふ焦燥記。あまを

視らるゝよ。推六勝久。敗軍四方ゝ充満して。今ハ退く路もあり。其上今宵の敗軍ハ。これ一人の身ゝ帰まり。勝家爰遣ら退陣を。勧めしらどもこれを用ひず。新の如くありてさり。いろでる失ある身をもつて。恥を恐び所容ゝと。立帰るべき法やある。某方こそ。無用の場ゝ長位して。山冠ある嗣ハ名失あり。蛮立帰りて勝家を。これゝ代りて補佐せゝまよ。我亦ひとつの計略あり。秀吉ゞ首を撃拉ら。上方勢を大敗ゝ。敗得ぜんび骨ゝあるまで。推て再帰るまゝと。諸ふ怨の鬼ざりられだ。勝久も今ハ絶方なく。足下新の如くんば。我亦父の命を奉て。これを測ふこと難ゝ。帰る道を失ふらり。場て亮に自軍を捨て。帰るハ不義のあり。再び戦ふ計略あらば。快

快行ひまひれらゝ。弱年ゝ乃茅も。一陣を投ゝもふせんと。勝久も今ハ一足去らぬ。光を吹してぞ強りゝる。牧其ゝ本勘七。原勘兵衛。蘭丸源四郎。仝源七。奇鳴保兵衛。毛利新内侍。いづれも一騎千ゝ当りて。怯弱を拉ざる勇士あり。撰舎ゝ。原光次郎。神戸兵左衛門。倫も退退し来ゝ。玄蕃が敵撃ゝ。直光ゝ。直光ゝ静て出んとする。原光次郎。雲時と禁や。今敵陣の曉嶮を寄るゝ。大将秀吉名士ゝ。智勇抜群ありとゝども。勝軍の撰ゝ乗して。幕下の強将いふも更あり。逸士麾従ゝ多まで。逆整ゝして功名せんと。おもいしくゝ極て出。本陣多くハ微勢

ふゝん。真虚ふ乗じて自方も亦。遠方郡方より陣郡ふ。
本陣留て攻蒐らべ。いづれも一陣ハ秀吉の。本陣へ加入らん。此本
陣ざふ所岩さべ。敵軍却て勝利とあるべ。九郎を技撓て
一生を。得るの籌策を為ふ。遂ふ盛政徴と学を拘。
名も朝こそ工夫しゝ。先向ふんと玄蕃盛政。戦を整して
上帯に織。遣熟る陣の概を。羅車の孫く打揮て。東
南の方へ退て（退て敵の備を立て志津が嶺の方を云）取て返せば。跡ふ縋て原先次郎元治濃
足組ふ導利國。柴田権六勝久倅おもいく ふ北向こそ。遠来
る故を撃敗し。六條ふ別まして戦登る。者路ハ分ると云ども。
如ハ羽柴ふ本陣を。只一條ふ合して。北進んとするのゝ為
も柴田三左衛門勝政も。玄蕃が告を聞と等し。同じく返

して自方を助け。喚く声して返報せしハ。他久間をもつて危ふ
しと。ちんふ。羽柴ともつて危しとちんふ。義ふ安危を圖らんこと。
路ふ返へるべし

臨再戦清正先生竹當懸　属　切成弁之

天の得る者ハ。敬まること能ハ。原元治よくも謀
て。盛政ふ再戦を勧め。羽柴嶽の本陣ある。紙ふ嶽を當的。
七方ふ領まして攀躋る。実ふ忠の勇士なれども。情むべ秀
吉ハ。天の助る器ある。孰ふ勝べき故あらんや。然ども
羽柴筑前守秀吉ハ。大星宮智の公ふして。天の言きも他
の厚きも。親微だるりの名將あるべ。敢度軍謀を用ゆと云
ども大地を撓撓の如く。曾て外ふ多あるふ。傍てや遠書の大

七豪三傑各
良敵の首
捉く秀吉の
御前にて
實檢こ
備ふ

合戦い。深役し深秘あるべ。遥ふ佐久間の三軍を退崇し。各有名の首級拘。凱歌峯て帰陣しるべ。秀吉歓悦斜ふらず。馘首実検しるひくふ。加爲。福島を叡として。門く務骨碑即して。良敵将を討拘る由。大張奇代の勲功ありと。返謾も褒賞しるよ。それぞれ加爲清正。福鴻正則。元相且元。脇坂安治。平野長康。稙谷武則。加爲加藤明。これを並せて然嶽七本槍と号るひ。石川貞友。桜井吉兵。仲木勝重。これをもつて三の力と稱えるよて。第一第二の軍功とし一るり褒賞感状の類ハ後段ふ載し紀る。大将秀吉華めて。張勇士ふ令しるよ。返揚ふ乗じて勝家の本陣まで攻呂べ。渠ハ古老の大将なるバ。攻るふいくるも急ふまべ。然れ

バ名ふ負ふ鬼柴田ふもせよ。遥敗軍ふ気怯して。軍城も自由なるまど。先く速火狐脇へ。弛向れよと河令ある。ところく戦使悪次敗ぜ。注伸そふとよだりく。正一ふ地ふ弛来るハ。羽柴秀勝の報兵あり。馬蹄奔て河茶ふ辛瞋。即人ふ正ふ。大扶辺の技寨くを亡滅ふふ。亜国勢劾のちどい。總岩と為りて一蹄の敵の。顧る撃もなりるしぶ。後月の蛇とやおもひくん。沈久間玄蕃とそどあるくて。柴田藤六。原孝次郎神戸長左衛門ちんどの弦将。雑兵寄と弛徒し。七ふ領きて再戦せ。あきさんと廻しく不て返し。必死と為つて攻登るし。蒔び強動ふるさふ。魚ぎ御加勢湯るべしと。注伸してぞ弛戻る。秀吉こ

を固しめし。極せ一番ホ掌中を。おもたび放番とうち
まひ。北軍駆まで義を重んじ忠を懐まハ。あるまじと思
ひしホ。然こそ再び返つるとて。裸まる河のまぎ汗りぬホ。業
山。羽柴田。惟須賀倍より。慌しく注伸つるハ。あまと酔し
めせ北戦勢。忍丸を極めて返せる矛ふホ。原美次郎。吉蕃を
投げ。勇を振ふて戦ひしに。浅野日向守。同兵八郎。赤尾源
助倍倫の自軍。既ホ戦死ホせしに。防戦難義ホ迫び
ぬ。次急強豚の御勢をもて。猿兵と頼ひたてまつること。近
方那方より云傳せること。雲霞風下ホ落るより。ひとく
驚く天さう しつば。勝濤ろ羽柴の法勇士。猫も鬼の猪と緘
驚し。突発せんと云めく状。秀吉更ホ動じ玉まび。張然

として笑ませ玉ひ。北国の敵兵寄。余方絞ホて返し一ふり
る。何屋の車をろ做出まべさ。法方ホ領を返せとハ。去ホ
らしき軍配ある。再戦大費ありとりくども。七絵の門と三方の
個こ。急ぎ那方ホ能向ひ。敵将の首摯掬て。暮び切ホ法へ
よや。いそげくと傑氏の令ホ。従ろへ撓らふものあらんや。
まもく號をまもく進で。七方ホ別を能出せ。其ぶ中
ふも加茂虎之助清正ハ。坤へ向ちんとせしぶ。儀と工夫し
て陣前ホ投鞘。小臣今日大垣ろ。剰ろ火急の庁供ゆへ。
不調孫の縛ふぶし。安懐矢金つろりぬ。是ち用の器ホ
して。孫ホ敵中の合戦ふまバ。大将の首出見ざる晌ハ。指拝も
伝へぐくい。万望生仆の當懐と。御免絞場ふホ。最切さ

加藤清正
嶺畔の竹を
砍らせて
當標を
作らしむ

ふ謝したてまつると。思投て悔ひる。統茶守猜霎時。沛
詞もかうしゝが。開も生竹の茗懐へ。海内無双の勇士あゝ
でい。これを用ゐる綽綽たゞ。もつとも汝が勇猛へ。世の絶倫と
稱するふ是也。然ども奏吉さくしゝふ。是ぞ料理もふ
を喃い。家人へ偏私の沙汰ありと謂まんもまゝ羞恥し。他
のおもちくもいうぐありと。理を説喩て令まるふぞ。虎之助も
詮らさあく。推て頼ふも嗚呼あゝんと。狂様まる際ふ蚤く
も欲矣。迫づくと足て喊の声。耳根熱しゝ聆え。しゝバ其ハ
推出せとか茂清正。自勢率具し郎宗ふ。沛ふ陳を遠辞
しゞ。老嘗表ふ義を丈を招き。汝那谷の洞下ふ刹り。大
竹一ふ裁取来也と。稟奏て馬乘せし。墓他ふ山ゝ他下を

ば。主ふ劣るふ後るゝふと。木村ふ羞。井上大九郎加藤清正ふ
級田角兵衛。跟を慕ふて突発ふし。彼方を睨と視ふとび遠方
ふ朝ふ欲將ハ。原表治郎元治ふし。これふ後跟勇士ふハ。警
見源四郎。同源七。飯貝九郎佐ふどいふ門ゝ。二百餘騎ふて進ん
ざり。其際迫くゝふ来ふ。清正莞爾とうち笑ひ。吁狡猾奴輩
うふ。虎之助が生竹の。功劫ふ弱ふ絵の。味を試せんと馬ふ鞭
くま。韁を楚と腰楠ふし。脆長極めて絵綽舞陽と嗅て拠
出も慈尖。冈くゝと笑る際もあゝもむ。飯貝九郎佐を富崖
へ。牲伏ふ突崩し。経て進む警見兄者。左右ふよると得る
ゝと。疾霹靂の絵ひるがへし。馬を繞らも其際ふ。源四郎を右
方ふ縋伏。源七を右ふ倒して。其首提と合まると忘得

清正が大膽竹こ
首と結びて
北軍を恐怖
あさしむ

ぞふと飯田角兵衛。一〻首を掻剥て。蹲踞の如く引つゝ
き。猛虎もあとへ退て義左丈。惡業のつきし竹ひさゝげ。
来るを看るより虎之助。其首屬ようと命兵湯。新て
八結束。撃て捨り。瞬くうちに十一級。熟柿の傍く蕭く
多り。這猛勢に雄〻に怖ざるべらん。紛〻として南走北
波。右往左倒に逃散るまバ。原来次郎も方便はまさ。欲も
る力の迫びゞくやおもひらん。微勢の敗軍をいさぎ〻に
命そふとも益あらんと。自勢を纏ひ。路を横截退んと
まれども。垣場に わゝ淹泥の山路。進退こゝに極りしに心
あゝぞも踏止り。要時ハ桃弟ひろり。這响加爰清正ハ。這場を
加爰清兵衛に任置。義左飯田を率伴て。左陳に純帰り。彼

碧桑竹に拴置る首取持せて御茶に出。戰場の次第を言條
しるもバ。秀吉大に感悦し玉ひ。今朱ぐめぬ泄ぶ褒功郎
今の褒美として。生竹の當懸を。弾まるりと命ぜるに
ぞ。虎之助面目拭絶し恩義を謝し たてまつるるあまさびに
是より加爰清正ぶ。生竹の當懸を用ひ。蔡び戰場へ純向ひ

以

繪本豊臣勲功記七編巻之七終